

## 絵画の中のはきもの

### “脚”の魅力を思う

見 — 眞理子

靴作りをテーマに描いてきた私にとって“脚”は人の温もりや生きてきた道程を表現できる重要なモチーフです。何度描いても毎回悪戦苦闘する難しい対象ですが、筋の動きや血管の膨らみなどを捉えようと夢中になって筆を進めていくうちに、「苦悩」が「快感」に変わる瞬間があります。その複雑なフォルムには人の心を惹きつける不思議な魅力があるように感じます。

こんなことを改めて思ったのは、今年の3月に東京都美術館で開催された東京二紀展でのことでした。今回は私を含む10名が「個展」というかたちで発表する機会を得ました。約9メートル四方の壁面に、父を描いた職人シリーズから木型や道具類をモチーフにした最新作までをそれぞれのストーリーで構成してみました。すべて「靴」に関する作品だけで埋め尽くされた空間はマニアックな世界になりました。

会場にいらした女性が、『私は脚が異常に好きで、変に思われそうで今まで誰にも話したことがなかったのです…。』とコミングアウト、彼女にとってこの空間は鳥肌

がたつほど快感を覚える場所で、理解者を得た喜びで涙ぐんでいました。ほかにもどんなに美しい顔のモデルさんを前にしても脚しか描けない方や、アキレス腱という特定した部位に惹かれている方もおりました。また、今回お会いした皆さんは全員女性だったことも意外でした。

今まで脇役として描いてきた“脚”が彼女たちをこんなにも刺激していることに驚き、私の作品はいったいどんな空気感を醸し出しているのだろうか、思わずグルッと会場を見回してしまいました。作品を発表するということは、観る側に影響を与えるだけでなく、作者自身もその反応によって新たな創作へのきっかけをいただけるのだと実感しました。

考えてみれば、私もずっと同じ「靴」をテーマに描き続けているのですから、相当な“脚好き”なのだと思います。いっそ彼女たちのご要望に応えるべくもっとディープな「かわとはきもの」の世界観を追究してみようかと、マニアックな意欲が湧いてきました。



東京都美術館の展示会場にて